

側妃志願！



エレイン

心優しき王妃。
おっとりしているが、
誰よりも王国の未来を
案じている。

陛下

ロズシェイン王国の国王。
鉄仮面を被っている。
お世継ぎ問題を解決するため
「創妃」を募集している
らしいが――？

アスティ

王宮で働く女中。
クールで真面目な女性。

リジィ

新人の女中。何やら
フケありらしい不良少女。

ジェイク

王宮の料理人。
アイーダのことを気にかけて、
何かと世話を焼いてくれる。



アイーダ^{あいどなま}(合田清香)

異世界にトリップした
18歳のフリーター。
きれい好きで掃除が趣味。
専用のお風呂が欲しくて国王の
「創妃」に立候補した。感情が
顔に出にくいため誤解されやすい。

ウィルフリート

アイーダが働く宿屋を訪れた
旅人。美形だが無愛想。
国内を転々としているらしいが、
その目的は謎に包まれている。

部長さん

城の中庭に出没する謎の猫。
謎つきと態度が、どこかの
会社の重役っぽい。

登場人物
紹介

目次

プロローグ	7
第一章 潔癖症ではありません。ただのきれい好きです	11
第二章 恐ろしいお人と接近遭遇しました	63
第三章 家政婦ならぬ、女中は見てしまいました	137
第四章 再び陛下の側妃に、志願します！	233

ロズシェイン王国の西部にある町、ミディブル。この町の時計台広場は町民の憩いの場である。サーカス団や奇術師が連日パフォーマンスを披露し、いくつもの屋台が立ち並んでにぎわう。ところがこの日、広場は沈黙していた。人がいない訳ではない。秋晴れの空の下、多くの人々が集まっていた。

そのほとんどが十代の若い女性。年頃の娘がいる家にはこの日の正午に娘を広場へ集めるよう、領主から指示が出ていたのだ。

各家の親たちは何が何だか分からないままに娘を送り出した。集まった娘たちの表情は、憂い顔をする者、悲壮感漂う者、興味津々な様子さまの者など、様々だ。そんな彼女たちを取り囲み、町の人々が物珍しげに見物している。

広場の南にそびえ立つ時計台の下には、明らかに貴族と分かる中年男性が数人いた。正午を告げる鐘が鳴ると、その中の一人がこほんと咳払いをして沈黙を破る。

「えー、本日集まってもらったのは、他でもない。我々は今、ハーデュアル国王陛下の妃を探しているー！」

プロローグ

その言葉に、集まった者たちがどよめいた。なぜなら国王には、すでに立派な妃きがいるからだ。「陛下と王妃エレーン様の間には、未だにお子がいらっしゃらない。これは我が国にとつて由々ゆづしき問題である。——それは分かるな？」

国王は御年おんとし二十五。王妃が他国から嫁いできて二年もの月日が経過しているが、王妃ご懐妊ほていの報は聞かれない。

広場は静まり返り、人々が固唾かたすを呑む音だけが響く。そんな中、貴族の男性は大声で告げた。「貴賤きけんは問わん。我こそは陛下の側妃そくひとなり、お世継ぎを——と思う者は前へ出いでよ！」

側妃とはいわゆる第二夫人のことであり、ロズシェイン王国ならではの身分だ。第一夫人である王妃には劣るものの、それなりの権力を持つことが出来る。

人々は一様に驚愕した。それはそうだろう、通常妃候補になるのは貴族出身の娘だけなのだ。

それが、貴族でも何でもない町娘から側妃を募もるとは。世継ぎが出来ないことを考慮しても、到底ありえないことであつた。

広場に集まった娘たちは予想外のなりゆきに戸惑い、不安げな表情を浮かべている。

「無論、申し出た者を陛下がお気に召されるかどうかは分からない。だが、もし一度でも陛下の寵愛ちようあいを得ることが出来れば、その後陛下の訪れが途絶えたとしても、それ相応の待遇を約束しよう」

その貴族の言葉は娘たちをその気にさせるどころか、一層不安にさせた。一度城に上がった以上はおめおめと郷里へ帰れない。夢のような生活を送れるかもしれない代わりに、来もしない陛下を

待ち続ける辛さを味わうかもしれないのだ。

それに絶世の美女と名高い王妃や、他の側妃たちとの争いも避けられないだろう。それは十代の娘にとつて、あまりにも過酷な運命だと思われた。

「あの——」

その時、尻込みする娘たちの中で、一人だけ手を挙げた者がいた。周りの娘たちが徐々に左右に分かれ、手を挙げた娘の姿が露あらわになる。

艶えんやかな黒髪と黒い瞳を持つ異国の娘だつた。目尻が少しだけ下がっており、ぷつくりとした唇の下には小さな黒子ほくろがある。美人という訳ではなかったが、少女と女のちよとど中間にある、何とも言えない危あやうい色気を醸かみ出し出す娘だつた。

「私、その側妃になります」

娘の宣言に貴族たちは意表を突かれた。貴賤は問わないと言つたが、まさか異国人が手を挙げるとは。言葉は通じるらしいが、どうすべきか……と、互いに目で探り合う。王妃も異国人なので側妃が異国人でも問題はない。だが、異国人の立候補者がいるとは誰も予想していなかった。

すると今まで黙もくしていた一人の貴族が、その娘に向かって問いかけた。

「見たところ、異国の者のようだが……陛下の寵愛を得る自信はあるのか？」

その言葉に、娘は大きく頷く。

「自信ならあります」

得意げに胸を反らし、二つの膨ふくららみを誇示する娘。大きめの衣服を着ているので分かりにくいも

の、よく見れば細身ながら、なかなか豊かな胸をしている。

娘は全員に聞こえるくらい大きな声で、高らかに宣言した。

「必ずや、陛下を私の虜にしてみせます！」

そして一度深く息を吸い込むと、止めとばかりに言い放つ。

「この、顔と身体で！」

その年頃の娘とは思えぬあけすけな物言いに、広場が騒然としたのは——言うまでもない。

第一章 潔癖症ではありません。ただのきれいな好きです

枕元にある時計が耳障りな音を立て、私——合田清香は目を覚ました。

六畳一間のポロアパルト、ここが今の私のお城である。掃除は行き届いているものの、家具は敷布団のみという殺風景な部屋だ。築四十年なので市松模様の床は歩くだけでギシギシと音を立てる。家賃は高いのにお風呂はなく、歩いて数分の銭湯まで毎日行かなければならない。

不便だが、両親を亡くして親戚とも縁を切った私には、保証人不要のこの物件しか借りることが出来なかった。おまけに玄関の鍵が古くてセキュリティが心配なので、大事な荷物はトランク型のキャリーバッグに入れて、常に持ち歩いている。

今日もいつも通り仕事帰りに銭湯とコインランドリーへ寄るつもりなので、私はキャリーバッグに衣類を詰めた。そして台所の流しで顔を洗い、髪を梳かすと、作業着に着替えて家を出る。作業着の色は水色に近い青で、胸元には「沢口クリンサービス」と刺繍されている。一人一着必ず購入させられるのだ。この出費はかなり痛かったのだ、擦り切れるまで着続けようと心に決めている。ここはある地方都市。大都会とは言えないけれど、地下鉄があるくらいには都会だ。

九月に入ったとはいえまだ秋の気配はなく、額にじわりと汗が浮かぶ。キャリーバッグを慣れた手つきで転がしながら、雑居ビルの一階に辿り着くと、古ぼけた半透明の扉をノックもせず開

けた。

「おはようございます」

私が挨拶すると、訝えない中年のおじさんがパソコンから顔を上げる。その眼鏡のおじさんの名は沢口さん、この沢口クリーンサービズ事務所の所長だ。

「おはよう」

座れば？ と所長がソファを指さすが、私は小さく首を振ってすぐ本題に入る。

「所長、今日の現場は？」

「今日のご新規さんで、北区にある事務所……って、清香ちゃん。いい加減、携帯かスマホを持ってくれない？」

「いりません。必要性を感じないので。それと、私の呼び方は合田でお願いします」

私は自分の名前があまり好きではない。だから他人には、いつも名字で呼んでもらっていた。ところが、所長は何度注意しても名前と呼んでくる。困った人だ。

「今時携帯も持っていないなんて、清香ちゃん彼氏いないでしょ」

「所長、それはセクハラです。あと、私は合田です」

携帯はお金もつたないので持つ気になれない。電話をする必要があれば公衆電話で間に合う。それに彼氏どころか初恋もまだだし、連絡を取りたい友人もない。人付き合いが苦手で人を避けて生きてきたからだ。

やれやれ、といった顔で所長が一枚の紙を手渡してくる。今日の仕事先と仕事内容、そして簡単

な地図が載っていた。

「備品、もらっていきますね」

「はいはい。持っただけドロボー」

所長はもはや顔も上げずに手だけをひらひらと振ってくる。たくさんのスタッフを抱えているため、私一人に構ってられないのだ。

奥の備品倉庫へ入ると、私は必要なものを揃え始めた。

私はオフィスやホテルなどへ赴き、掃除をする仕事をしている。けっこうな重労働だが、その分時給が高いので文句はない。

重曹、クエン酸、石鹼、そしてゴム手袋や雑巾、スポンジなど各種道具はちゃんと支給されるし、余った分は少量ならば持ち帰りが許されているので掃除好きの私にはたまらない。

重曹というのはベーキングパウダーとほぼ同じものだ。油脂を乳化したりたんぱく質を分解したりする作用があり、磨き粉にも消臭剤にもなる何とも便利な粉である。

クエン酸はレモンに含まれている酸味成分で、雑菌の繁殖を抑え、水垢や石鹼垢を落とす。水で薄めたクエン酸をスプレー容器に入れると手軽に使えて便利だ。

ちなみに掃除に重曹を使用するのは沢口所長の経営方針である。環境や人体に優しいナチュラルクリーニングが人気を呼び、事務所を大きくしていったそうだ。

あつ、今日はエッセンシャルオイルもある。それに気付いて、ちょっとテンションが上がった。なになに、ティーツリーにラベンダーにローズ……いいチョイスだ。これももらっていいこう。

私はキャリアバッグからシュルダールバッグを取り出した。このシュルダールバッグには仕事に欠かせない七つ道具が詰まっている。

「あんまり持ってたくなよ」

所長の言葉に「はい」と返事をしつつ、空き容器に遠慮なく入れていく私。

「その潔癖症さえなければ、もっと良い仕事に就けるだろうに。あと、もう少し笑った方がいいよ。何かもつたないよね、清香ちゃんって」

「潔癖症じゃありません、ただほんの少しきれい好きなだけで。それと私は合田です」

無表情だということは自分でも分かっているので否定しない。「合田って無表情で何か怖いよな」と何度言われてきたことか。生まれつきだが、そのせいで誤解を招いたり損をしたりすることも多かった。

だが、潔癖症というのは全力で否定させてもらいたい。私が本当に潔癖症ならば銭湯なんて利用出来ないし、この仕事も出来ないだろう。

シュルダールバッグに掃除用具を詰められるだけ詰め込むと、もう用はないとばかりにさつさと事務所を出ていく。そんな私を、所長は何とも言えない表情で見送ってくれた。

徐々に気温が高くなる中、地図を頼りに今日の現場へと向かう。もちろん預けられる場所もお金もないのでキャリアバッグは持ったままだ。

今日の派遣先は、とある小さな会社だった。水回り掃除のパートさんが一週間前に辞めてしまっ

たので、新しい人が見つかるまでの繋ぎとして、うちの会社に依頼してきたらしい。

元々掃除していた人がいるなら、そこまで汚れてはいないだろうな……なんて軽い気持ちでいたが、私を出迎えたのは、すさまじく臭いのきついトイレだった。

パートさんがいなくなつて一週間しか経ってないのにこれか？ と呆れるやら絶句するやら。もはや異臭事件だ。

「すみません。我々も掃除しようとは思ったんですが、どの洗剤を使えばいいのか分からなくて。ほら、下手に洗剤を混ぜると有毒ガスが発生するって言うでしょう？ ですから……」

気弱そうな男性社員さんが、身を縮こまらせながら言い訳している。私が無表情のまま固まっているので、怒っていると思つたのかもしれない。

だが、むしろ逆だ。ギラリと光つたであろう私の目は、幸い相手からは死角だった。

「掃除用具はどこですか？」

私はそう尋ねながらも、それらしき扉を勝手に開けた。中には何も書かれていないスプレーボトルが数本と、重曹の大袋。前のパートさんも重曹を愛用していたようだ。私はシュルダールバッグの中から一枚の紙を取り出して、社員さんに差し出した。

「この紙にサインしてもらえますか？」

「何ですか、これは」

「私どもの掃除で万が一シミなどが出来ても責任を問わない、という誓約書です。もちろん細心の注意を払って作業するつもりです」

「ああ、シミくらい大丈夫ですよ。何せ、ご覧の通りの古い建物ですから」
男性社員さんがさらさらっとサインした紙を受け取り、しっかりとバッグに収める。そして私物を社員用のロッカーに入れさせてもらった。

準備が整い、さあ始めるぞと最初に向かった先は、給湯室だ。
ここもひどい有様だった。コーヒーをこぼした跡がそのまま残っていて、排水溝からは異臭がする。

私はゴム手袋をはめ、重曹で水回りを磨いた後、目を背けるようにして生ごみを取り除く。そして重曹とクエン酸水を混ぜ、その泡で排水溝の汚れを浮かし、ブラシで磨いてからお湯で流した。給湯室の掃除が終わったら、次はトイレだ。タオルで顔の下半分を覆うと、床や壁に重曹を撒き散らし、ブラシでガシガシと磨いていく。

元々はきれいに掃除されていたんだろう。そう頑固な汚れもなく、あつという間にきれいになった。ええい、サービスだ、と重曹を適当な容器に入れ、そこにエッセンシャルオイルを数滴垂らして置いておく。

ピカピカになったトイレを見て、私は満足げに頷いた。この達成感は何事にも代えがたい。掃除すればするほどテンションが上がる質なのだ。今だったら便器に頬ずりでも何でも出来る。

掃除が終わった頃、さっきの男性社員さんがやってきて驚きの声を上げた。

「わー、見違えるほどきれいになりましたね。それに、何か良い匂いがあります!」

「重曹にエッセンシャルオイルを垂らしたものを置いておきました。重曹には消臭効果があります

から。定期的にオイルを足すと三ヶ月くらいは持ちますよ。その後は掃除に使ってください」

「なるほど、次の担当者に伝えておきます。いやあ、ほんと助かりました」

「またこのような機会がございましたら、よろしくお願いします。では、これで失礼します」

私はそう言って頭を下げると、トイレを出てロッカーへ向かった。

気付けば時刻は正午を過ぎている。思ったよりも時間を食ってしまったようだ。

ロッカーから荷物を取り出し、出口へと向かう。すると階段の横に、大きな姿見の鏡がかかっていて。縁に模様が付いている洒落た鏡だが、残念なことにすっかり曇っている。

——拭きたいな。

いやいや、契約は水回りだけだ。勝手に掃除する訳にはいかない。……だけど、こんなに素敵な鏡が曇っていたらもったいないじゃないか。

しばしの葛藤の末に、周りに誰もいないことを確認して、クエン酸スプレーと雑巾をバッグから引つ張り出した。ささっと拭けばバレないだろう。

私は鏡にスプレーをシュッと吹きかけて雑巾で拭こうとして——結局、拭けなかった。

なぜなら雑巾を持つ手が、鏡の中に吸い込まれていたからだ。

そんな馬鹿な。

驚いて手を引つ込めようとしたけれど、手首を掴まれているかのようにびくともしない。足の裏を鏡につけてふんばろうとすると、その足までも鏡に吸い込まれていく。底なし沼みたいにもがけばもがくほど引き込まれていき、ついに右半身が鏡の向こうへと消えた。

人間、不思議な現象に直面すると声が出なくなるらしく、助けを呼ぶことも出来なかった。私は何か掴まるものはないかと左手を彷徨わせ、手に触れたものを無我夢中で掴んだ。だけどそれは何の役にも立たずに、私と一緒に鏡に吸い込まれてしまう。それは鏡のそばに所在なさに佇んでいた、私の全てが詰まったキャリーバッグだった。



気付けば私は、どこかの地面に倒れていた。半身を起こして周りを見回し、嘩然とする。舗装のされていない、土のままの道。石や木で造られた家々。遠くには青々とした山と、どこまでも続く青空が広がっている。まるで中世ヨーロッパを舞台にした映画やゲームの世界に迷い込んでしまったみたいだ。

一体何が起こったのだろう。ここはどこなのだろう。……何も分からない。ただ一つだけ分かるのは、太陽が中天にあるので、今は正午だということくらいだ。

いや、頭のどこかではすでに分かっていた。鏡に吸い込まれるというありえない現象と、周囲の様子から導き出される結論は一つしかない。でも、心がそれを拒否していた。信じたくなかった。まさかここが……異世界かもしれないなんて。

背後がざわざわしているのに気付いて振り返ると、私を遠巻きに眺めている人たちが数人いた。どう見ても日本人じゃない。ひと昔前の西洋人のような人たちが、囁き合いながら私を見ている。

彼らが話しているのは明らかに英語ではなかった。

えーと、何か警戒されてるっぽいし、それじゃなくても目立ってるし、どこかに移動しようか。そう思っ、私はひとまず立ち上がった。

それにしても、お腹が空いたな。今日のランチはコンビニのサケおにぎりにしようと思っていたのに……

我ながら、この緊急事態にあつて呑気なものだ。さすがに鏡に吸い込まれた時は驚いたけれど、元来私は少々のことでは動じない性格である。それに、腹が減っては戦が出来ぬ。この状況を嘆くより、食欲を満たしてから冷静に状況を把握するべきだ。

その時、どこからともなく漂ってきた美味しそうな匂いが、食欲を強烈に刺激する。私はそれにつられるように、ふらふらと歩き出した。

行き着いた先は二階建ての食堂だった。看板にお酒の絵が描いてあるところを見ると、夜は居酒屋になるのだろう。今はランチタイムなのか、外までにぎやかな声が聞こえてくる。

中をそっと覗こうとすると、大柄な女性が店から出てきた。私の母親くらいの世代のおばさんと目が合う。おばさんは私に何か話しかけながら、袖を引つ張ってきた。

「違うんです。私はお客じゃありません」

それにお金もないです。と言っても、当然通じない。ならばジェスチャーで、と思っ、両手で大きく×印を作る。NOです、バツです、結構です。

それなのに、おばさんはぐいぐいと強引に腕を引つ張る。ささやかな抵抗も虚しく、私はあつと

いう間に店に引つ張り込まれ、端の席に座らされた。

すると奥の方から男性の声が聞こえてきて、お婆さんはそれに応えながら、そちらへ行つてしまつた。

えーと、どうしよう。お財布には日本円しか入つてない。いや、たとえ外国のお金が入つていたとしても、使えるとは限らないが。そもそもここはどこなんだろう。もしかして大昔の西洋かどこかにタイムスリップでもしたのだろうか。

他のテーブルにはたくさんのお客さんがいて、地元民らしき人もいれば、旅行者のような身なりの人もいる。

物珍しげに見物していると、目の前に野菜と肉を煮込んだ料理が置かれた。例のお婆さんが向かいの席に座り、にこにこしながら手で料理を口に運ぶ仕草をしている。

食べてもいいの？ お金ないけどいいの？ いいのなら、遠慮なく食べちゃいますよ。

後からお金を請求されたら日本円を置いて逃げよう、と覚悟を決めてスプーンを掴む。そして一口食べると、もう止まらない。少し変わった味だけど、とても美味しい。お皿はすぐ空になつてしまつた。

その瞬間、驚くべき異変が起こつた。

「全くお前つてやつは。猫や犬だけじゃなく、とうとう人間まで拾つてきやがつたのか」

「うるさいよ。文句があるなら、もつと稼いでから言うんだね！」

突然、そんな言葉が耳に飛び込んで来たのだ。この二人、日本語話せるの？ いや、違う。私が

彼らの言語を理解出来るようになったんだ。

そのことに驚いていたら、旦那さんらしき男性と大声で言い合つていたお婆さんが、私に話しかけてきた。

「あんた、どつから来たんだい？ 名前は？ ……つて、言葉が通じないんだつたね」

どうしたもんかねえ、と困つた顔をするお婆さんに、私は話しかけてみる。

「あの一、通じてます」

するとお婆さんはぎよつとした表情を浮かべた。

「何だい、この国の言葉を話せるんじゃないか！ それを早く言いなよ！」

どうやら私の言葉も相手に通じたらしい。さつきまで通じなかつたのに、なぜだろう？ この料理を食べたせいだろうか。そんなことがある訳ないとは思うけれど、さつきからありえないことばかり起きている。

首を傾げる私にお婆さんはベリンダと名乗り、私の名前を再び尋ねた。

「この辺じゃ見ない顔だね、どこから来たんだい？」

「えーと、日本から来ました。名前は合田です」

「アイーダか、良い名じゃないか。ニホンつて国は聞いたことないけど、ガルナタ大陸から来たんだらう？ あつちには黒髪が多いつて聞いたことがあるよ」

アイーダではなく合田だが、説明するのも面倒なので曖昧に頷いておく。だからそんな奇妙な格好をしているんだね、と勝手に納得してくれている様子なので、勘違いしたままでいてもらう。

しかし、ガルナタなんて名前の大陸が地球上に存在しないことは明らかだ。いやいや、私が知らないだけで、日本かアジアのどこかの地域の別称なのかもしれない。最後まで希望は持とう。

私はこの期に及んで、異世界に来てしまったのではないかという考えから全力で目を逸らす。今まで地に足を付けて生きてきたんだ、そんな夢みたいな出来事が私の身に起こるはずがない。

ベリンダさんに、ここに来た経緯を話すのはやめておく。頭がおかしいと思われるのがオチだからだ。

「遠いところからはるばるこんな田舎町に来るなんて、あんたも物好きだね」

「はあ」

いや、私だって来たくなかったですけども……

「それであんた、この町に何しに来たんだい？」

来た。非常に困る質問が。ここはわざわざ遊びに来るほど栄えた町じゃないみたいだし、どうしよう。

「え、えーとですね、先日両親が他界しまして、親戚を頼ってこっちの大陸に来たんですけど、少々そりが合わなくて、ですね……」

「親戚の家を飛び出したってことかい？」

「え？ ……ああ、はい。そうです」

実際の体験を若干アレンジして話すと、ベリンダさんはすんなり信じてくれた。目に涙まで浮かべている。嘘をつく時は真実を交ぜるとぐつと信憑性が増すというのは、本当のようだ。

本当は両親が死んだのは中学生の頃だし、高校卒業と同時に親戚の家を飛び出してから、もう半年も経つのだが。

「なんてことだい、全くひどい話だね。無理矢理連れ込んで本当に良かったよ。外からじーつと覗みつけてくるから何事かと思つて出てみたら、盛大に腹を鳴らしていたから放つておけなくてね。さ、おかわりもあるから、たんとお食べべ！」

「ありがとうございます。ちなみに覗みつけていた訳じゃなくて、私は元々無表情なんです、すみません」

ベリンダさんは、よほど辛い目に遭つたんだねえ、と言いながらエプロンの端で涙を拭う。私の無表情までひどい親戚のせいだと思つているらしい。

あれ、これつてもしかしてチャンスなのではないだろうか。どういう理由でここに来てしまったのかは分からないけれど、すぐに元の世界へ戻れる保証はどこにもない。それに、どうせ元の世界には私がいなくなつて困る人もいない。ただのアルバイトだから代わりはいくらでもいるし、以前お給料も受け取らずに来なくなるスタッフが後を絶たないと、所長がぼやいていた。私が行かなくなつてもまたか、と肩を落とすくらいだろう。

アパートの家賃も振り込んだばかりだし、わずかな私物くらいは管理人さんが処分してくれるはずだ。もちろん心配してくれるような友達もいない。とすれば、一人見知らぬ土地で路頭に迷うより、しばらくここでお世話になる方がよっぽど良いかもしれない。

私は俯いて泣き真似をしながら、一世一代の大芝居に打って出た。

「家を飛び出したものの、行くあてもなくて……。お願いです、しばらくの間、私をここに置いてくれないか？ お店を手伝いますから」

「ええ!? よしとくれよ、人を雇うゆとりなんてないよ」

「そこを何とか。お給料はいりません。寝る場所と食事だけいただければ大丈夫です」

給料はいらぬ、というフレーズにベリンダさんはびっくりと反応した。人手は欲しいが払う金はない——日本でも同じ問題に苦しんでいる経営者がゴマンといるだろう。

「いえ、寝る場所もいりません。床や椅子の上で寝ますから。今までも似たような場所で寝起きしていたので問題ありません」

「こんな子供をそんなところに寝かすなんて、なんてひどい親戚なんだい！ ……分かった、いいよ。うちに住みな！」

よし、自分の宿ゲット！ 私はテーブルの下で密かにガッツポーズを決めた。この国のお金は持っていないし、仕事もなければ家もない。それらを一気に手に入れたも同然なのだから、ベリンダさんみたいな良い人と出会えて本当に助かった。私が言うのも何だが、彼女が詐欺に遭わないか非常に心配である。

その後、詳しく話を聞くと、ここはセトルヴィという小さな町にある屋見亭というお店らしい。一階は食堂だけど二階が宿屋になっていて、旅人や商人がひっきりなしに訪れるので常に忙しいという。

私は二階の物置に住まわせてもらうことになった。そこは物置とは思えないほど広い部屋で、今まで住んでいたボロアパートに比べたら雲泥の差だ。ベッドも窓もあり、快適すぎるくらいだった。すっかり感動した私は、シーツと掛布団を運んで来てくれたベリンダさんに、さっそく掃除をさせて欲しいと申し出た。いつもベリンダさん一人で掃除しているにもかかわらず、かなり細かいところまできちんと手入れされている。だけど客が多いせいで床には砂や埃が溜まり、食べこぼしのシミも尽きないのだとか。

掃除してもどんどん汚れるとは、何て素敵な環境なのだろう。やる気が漲ってくる。よそ様の自宅を掃除させて欲しいだなんて失礼かもしれないと思ったけれど、「いいのかい？ 助かるよ」とベリンダさんは気を悪くした様子もなく喜んでくれた。

自分の部屋から掃除していいと言われたので、借りてきた羽バタキと箒、そして自分の七つ道具を取り出して掃除を始める。汚れは少なく、部屋の掃除はすぐに終わった。

食堂はまだお客さんがいるので後回しにして、先に二階の廊下をやることにした。昼間から部屋に引きこもっている人はいないようで、二階はとても静かだ。羽バタキで壁の埃を払い、廊下を箒で掃く。

ああ、気持ちいい。最高だ。知らない場所に来てしまったという不安も、掃除をしていると薄れていく。

ウキウキしながら壁と扉を拭いていき、最後の扉に取りかかろうとした瞬間——扉が中からガチャリと開き、私のおでこに直撃した。……ただではなく、その勢いで後ろに倒されて、私は床に尻もちをついてしまった。

誰だ、こんな真つ昼間から部屋にいるのは。いやいや、相手はお客様。文句を言っちゃダメだと自分に言い聞かせ、おでこを押さえつつ相手を見上げた。

それは若い男性だった。耳にかかる少し長めの髪は銀、そして切れ長の涼しげな目は深い蒼^{あお}。無駄なものは一切ない整った容貌をしている。この世界に来たばかりだけど、今まで会った人は皆素朴な顔をしていたので度肝を抜かれた。

少し首元が開いた服を着ていて、ほどよく筋肉が付いているのが服の上からでも分かる。登山用のようなごついブーツを履^はいているので、おそらく旅人だろうと私は判断する。

「申し訳ございません」

悪いのはどちらかといえば向こうだけれど、扉のすぐそばにいた私も悪いのでとりあえず謝った。もしクレームでもつけられたら、快適居候^{いきまご}ライフが初日にして終わりを迎えてしまう。

「……邪魔だ。どけ」

「……え？」

美形さんの口から出た言葉が理解出来なくて、私は思わず聞き返してしまった。美形さんの眉間^{まげん}には、面白いくらい皺^しが寄っている。ああ、私がいつまでも扉の前に座っているせいで、部屋から出られないんですね。

「ごめんなさ〜」

はい、どきましたよ。

美形さんは私と掃除用具を一瞥^{いちべつ}した後、すぐに興味をなくした様子で階下へ向かった。

何か嫌な感じだ。手ぐらい貸してくれても良いのではないだろうか。私は仕方なく自力で立ち上がるのと、お尻の埃^{ほこり}を払った。

こんなことしている場合じゃない、掃除だ掃除。取るべき汚れが私を待っている。待っててね、汚れちゃんっ。



「アイーダちゃん、これ二番テーブルね〜」

「はい」

この店のご主人であるホルスさんから熱々の皿を受け取ると、私はにぎやかな店内をぐるぐると移動する。

ここで働き始めてもう一週間になる。ホルスさんとベリンダさんには子供がいなく、私を本当の娘みたいに扱ってくれていた。

いきなり見知らぬ土地に来てしまっただろうかと思うけれど、彼らに出会えて本当に良かったと思う。そうじゃなければ、こんなに穏やかな気持ちで毎日を過ごせてはいなかったはずだ。彼らは私の無表情を何とも思わないようで、普通に接してくれる。そればかりか、アイーダがいてくれて助かるよ、と言ってくれるのだ。

木で造られた店内はアットホームな雰囲気があり、とても居心地がいい。料理を運び終えた私は

空いた席に移動し、年季の入ったテーブルと椅子を整え丁寧に拭く。仕上げに町の外で摘んできた花を飾れば、素敵なインテリアの出来上がりだ。

そろそろランチタイムも終わりという頃、一人の男性客が二階から下りてきた。周りには一切目もくれず、無言のまま端の席に着く。

先日部屋の扉を私のおでこに直撃させた人だ。いつもこのくらいの時間に食堂に来て、昼食を食べるとまた部屋に戻る。彼は一体何者なのだろうか。

「ベリンダさん、ベリンダさん」

「何だい、アイーダ？」

「あの男の人、誰だか知ってますか？」

私の視線の先を見たベリンダさんは、ああ、と言って声を落とす。

「確かウィルフリートさんって言ったか、王国内を転々としているらしいよ」

「転々とは？ どうして？」

「さあ。お客さんにはお客さんの事情があるからね」

あまり詮索しちゃいけないよ、とやんわり窘められる。しまった。客商売をする以上、個人的なことには立ち入らないのがルールだと最初に教わっていたのに。

「すみません、余計なことを聞いて」

「いいさ、あれだけの男前なんだから、アイーダでなくてもそりゃ気になっちゃまうよ」

ベリンダさんが熟知り顔で何度も頷く。いや、私はあの男性が男前だからではなくて、生活リズムが不思議だから尋ねたんですけども。

そう説明しても、ベリンダさんは完全に誤解して取り合ってくれなかった。どうやら私が照れていると思っているようだ。

「ほら、あのお客さんのところに注文を取りにいっておくれ」

「え、いつもはベリンダさんが行ってたじゃ……」

「ほーら、早く！」

「は、はこ」

ベリンダさんに背中を押され、私はしぶしぶウィルフリートさんという男性のテーブルへ向かった。

「こんにちは。今日のお昼の献立はお野菜の煮込みと鳥肉の炙り焼きですが、どちらになさいませるか？」

「どっちでもいい」

「はい？ ……えーと、どちらか選んでいただかないと……」

「どちらでも構わないと言っている」

優柔不断なのか、それとも食にこだわりがないのか。無愛想な顔からは何も読み取れない。

「で、では、お野菜の煮込みはいかがですか？ 確か昨日はお肉料理を召し上がっていましたよね。お野菜の煮込みは器がパンになっていて、ソースが染みたパンがとっても美味いですよ」

そのままだと固いパンが、ソースを吸うことでしっとりするのだ。ああ、味見した時のことを思

い出しただけで、よだれが垂れそうになる。私も昼の仕事が終わったらいただく予定だ。

「じゃあ、それを」

「はい。少々お待ちください」

ホルスさんに注文を伝え、用意してもらった料理を私が運んでいくと、ウィルフリートさんは何も言わずに食べ始めた。他のお客さんのようにがつつくこともなく、黙々と料理を口に運ぶ。表情が変わらないので、美味しいと思っっているのかどうかすら分からない。

「いかがですか？」

「……悪くない」

ウィルフリートさんがそつげなく感想を述べる。でも私にはそれが「美味しい」と言ったように聞こえて、途端に彼が良い人に思えてきた。ホルスさんの料理を褒められると自分が褒められたみたいに嬉しくて、心が躍る。

食事を食べ終えたウィルフリートさんは、さつさと自室に引き上げていった。片付けついでに彼のお皿を覗くと空になっていたので、私はますます好感を持った。

ウキウキしながら空いた席を片付けていたら、ベリンダさんが声をかけてきた。

「アイーダ、ここはもういいからお使いに行つてくれないかい？」

「はいっ」

私は店を出て、ベリンダさんに言われたお店に向かった。そしていくつかの商品を届けてもらうように依頼していたら、思いのほか遅くなってしまった。

急いで星見亭へ帰ると、カウンターの上に、私が摘んで来た花とは違う白い花が飾られていることに気付く。

「この花は……？」

「ああ、それかい？ さつきウィルフリートさんがふらりと出掛けて行ってね、すぐに帰ってきたかと思つたらその花を渡されたのさ。捨てておいてくれて頼まれたんだけど、もつたないから飾ってみたんだよ」

「へえ、そうなんですか」

私はその小さな花に視線を戻した。無愛想で言葉が足りないだけで、冷たい人ではないのかもしれない。

花を眺めながら、明日はもつと話しかけてみようかな、と思つた。

「アイーダ、この服どうかしら。あなたに似合うと思うんだけど」

そう声をかけてくれたのは、近所に住むナタリシアさんだ。王都で美容師として働いていた彼女は、結婚と同時に旦那さんの地元であるセトルヴィに引っ越してきたという。

どうやら身なりに構わない私を見て彼女のやる気になったようで、何かと世話を焼いてくれる。赤毛で頬にそばかすのある彼女は、子供の頃好きだった物語の主人公に似ていたので、私はすぐに親しみを覚えた。優しいお姉さんといった感じだ。

ナタリシアさんはカラフルな刺繍が入った膝丈のワンピースを、笑顔でテーブルの上に広げた。

足元には編み上げブーツまで置いてくれる。

「別に、これで十分ですよ」

私は今着ている服を見下ろす。この茶色のロングワンピースと白いエプロンは、ベリンダさんの若い頃の服らしい。

「それ、ベリンダさんには悪いけど、少し型が古いのよ。アイダはまだ若いんだもの、もっとかわい服を着なきゃ」

「でも、私には服を買うお金がないんです。せつかく持ってきてくれたのに、ごめんなさい」

「お金なんていらないわ。着てくれるだけで嬉しいから」

「いえ、そんな訳には……」

「いいのいいの。アイダにはいつも家事を手伝ってもらっているから、そのお礼よ」

ナタリシアさんは、からからと笑った。彼女は妊娠中で、悪阻がひどいらしい。そのためおろそかになっている家事を私が手伝っている。といっても私に出来ることといえば、掃除とお使いくらいだ。それなのに、色々と親切にしてくれている。

家族と離れて寂しくないのかと聞かれた時、家族はいないし深く関わっていた人もいないから寂しくないと答えたら、更に世話を焼いてくれるようになった。ナタリシアさんに心配をかけまいとしたのに、逆に気を遣わせてしまっても申し訳ないと思う。

「ね、ちよっと身体に当ててみて。少し大きいかしら？」

「大丈夫だと思えます。ありがとうございます」

私は感謝の気持ちを含めてナタリシアさんを見つめた。無表情だからちゃんと伝わったか不安だったけれど、彼女は優しく微笑んでくれた。

その時、厨房で洗い物をしていたベリンダさんがひよいと顔を覗かせる。

「ナタリシア、ご飯まだなんだろ？ 食べていきな！」

「わっ、嬉しい！ 私、食べ悪阻なの〜」

食べ悪阻とは、常に何か口にしていないと気持ち悪くなる悪阻のことらしい。食べたらずき気がするのが悪阻だと思っていたけれど、人によって症状は様々なようだ。

ちなみに星見亭に来て以来、私の体重は順調に増加している。今まで日に三食食べられることは稀だったのに、毎日栄養のある食事が取れているからだ。おかげで、すっかり舌も肥えた。

給料日前によくコンビニ弁当を前にして、よだれを垂らしていたことを思い出す。見かねた店員さんが、廃棄する予定の弁当をこっそりくれたこともある。商品の前に立ちつくす私が邪魔で追いかけてくれただけかもしれないけど、あの時はそのお兄さんが神様に見えた。

つまり何が言いたいのかというと、私は今意外と幸せだということだ。自分のことを気にかけてくれる人がいるというのはこんなにも心地よいものなのかと、新たな発見に驚いている。

「アイダ、ちよっと来ておくれ」

「はい！」

ベリンダさんに名前を呼ばれ、私は元気に返事してから厨房へと向かった。

月が柔らかい光を落とす深夜……時計を持っていないので正確な時間は分からないが、多分夜の十時過ぎくらいだろうか。こっちの人たちは朝が早く、その分夜も早い。宿泊客が眠りについた中、音を立てないようにゆっくりと階段を下りる。

抜き足差し足で厨房へ向かい、小脇に抱えたポーチから小さいボトルを取り出す。そして汲み上げてあった井戸水を失敬して桶に入れると、長い髪を浸した。次いでボトルから出した液体を、髪の毛につける。

この世界に来て最も驚いたのは、こちらの人が風呂にあまり入らないということだ。この町には一つだけ小さな湯屋があるけれど、入浴料が高額で一般人には気軽に払えない。

では、どうするか。

選択肢は三つ。一つ目は、濡らしたタオルで身体を拭く。二つ目は、町の外にある湖で泳ぐ。そして、最後の選択肢は——入らない。

それを聞いた時、私は目の前が暗くなった。他人がお風呂に入ろうが入るまいが、よつぼどの異臭を放っていないければ気にならない。だが風呂好きの私にとって、これは死活問題だった。

日本では食費を切り詰めてでも、每晚近くの銭湯で入浴していた。ひどく汗をかいた日などは、朝と夜の二回行っていたのだ。そんな私なので、風呂に入らず我慢するなんて絶対、無理。よって三つ目の選択肢は全力でお断りさせていただく。

だけどお金がないから湯屋には行けない。かといって、湖で水浴びというのもただだけない。なぜなら、湖には雑菌や虫がうじゃうじゃいるからだ。

ということ、二つの選択肢が消えた私に残された道は、夜中にこそこそ髪や身体を洗うことだった。

石鹸は持っているけれど、シャンプーはない。そこで苦肉の策として、手持ちの材料で似たようなものを作り出した。

重曹とホルスさんからもらったはちみつを混ぜ、水で薄めたものだ。今髪につけているのがそれである。全く泡立たないけれど、頭皮の脂が取れてすつきりする。

仕上げはクエン酸と水を混ぜてローズのエッセンシャルオイルを数滴垂らした、なんちゃってリンスだ。これを使うと髪がサラサラになって、良い香りがする。

湯を沸かす訳にはいかないので水でしか洗えないのが難点だけど、洗えないよりは良い。これから寒くなったらどうしようとは思いますが、今はこの方法で耐えるしかない。

うわー、さっぱりしたー、と洗い終わった髪をタオルで拭く。この国にもタオルはあるけれど、ほとんどただの布だ。私のタオルは日本から持ってきたものだが薄っぺらな安物なので、何とか怪しまれずに済んでいる。

さあ、あとは石鹸を付けたタオルで身体を拭いたら終了だ。

「……何をしている？」

突然声をかけられ、私は肩をビクリと震わせた。

全く気配を感じなかった。足音さえも。

髪にタオルを載せたまま恐る恐る視線をやると、厨房の入り口にウィルフリートさんが立って

た。奇妙なものを見るような目でこちらを見つめている。なぜか革鎧かわよろいを身に付け、腰には剣はを佩はいていた。そんな重裝備にもかわかわらず全く音を立てないなんて、本当に何者なのだろう。

「か、髪を洗っています」

「髪……？」

何と言えばいいのか分からず、私はありのままに状況を説明した。彼は怪訝けげんそうに私の髪を凝視してから、呆れたように溜め息をつく。

「もう夜も遅い。部屋に戻れ」

「ウイ、ウイルフリートさんはどこかへ出掛けるんですか？」

「お前には関係ないだろう」

ぼつさり切られた。私がそれ以上何も言えずに口を閉じると、ウイルフリートさんは踵かかとを返し、音を立てずに食堂の扉を開ける。

灯りは持っていないのですか？

そう聞こうとして、私は口を噤つぶんだ。——彼の姿があまりに幻想的だったから。

扉の隙間すきまから差し込む月明かりに照らされ、青みがかった銀の髪が艶つやめく。

扉が閉まる前に一瞬だけ見えた横顔は、いつもと同じく固い表情のままだった。だけど、何だか痛みをこらえているように見えて、思わず目を奪われた。

それにしても、こんな時間にどこに行くんだろう。もしかして毎晩こうやって外出しているのかな？ だから昼間はずっと部屋にいるのだろうか。

彼が音もなく閉めた扉を、私はしばし見つめていた。

それからどのくらい時間が経ったのか、ぶるりと震えて我に返った。夜はさすがに冷える。

ああ、こんなことしている場合じゃない。早く身体を洗って部屋に戻らなくちゃ。また人が来ないとも限らないし、明日も早いからさっさと寝ないと。

私はタオルを水みづに浸ひたして石鹸せっけんを擦りつけ、手早く身体を洗った。

だけどその夜は明け方まで寝付けなかった。——どうしても、胸の鼓動が収まらなかったからだ。



翌日、ランチタイムが終わる頃に、またウイルフリートさんが現れた。まるで昨夜のことなどなかったかのように、いつもの席に座る。髪を洗っていたのを見られたことを思い出して、一瞬気ままずくなった。だけど別に裸を見られた訳ではないので、いつも通りに注文を取りに行く。

「今日はどちらのメニューにしますか？」

「……お前のすすめる方でいい」

「分かりました。少々お待ちください」

どうやら食に関しては、多少なりとも信頼を得られたようだ。ちょっと……いや、かなり嬉しい。とはいえ、また夜中に目撃されたくはないので、その日から身体を洗う時間をずらすことにした。

ウィルフリートさんが出掛けるのを確認してから厨房へ行くのだ。

それでもう彼と鉢合わせすることもないだろう。

……そう思った矢先に、事件は起きた。

その日はとても慌ただしい日だった。部屋へ戻るとすぐうとうととして、身体を洗いに行くのが夜半過ぎになってしまった。

私が身体を洗い終えて周囲を掃除し、部屋に戻ろうとした時だった。

ガチャリと音を立てて食堂の入り口が開き、闇夜に溶けるような黒い影が扉の向こうから現れた。恐る恐る燭台の灯りを向けると、思った通り、ウィルフリートさんだった。何やら殺気を纏った彼の登場により、空気が一瞬で凍る。

同時に変な匂いが彼の方から漂ってきた。血の匂いだとすぐに分かる。

ウィルフリートさんは私の存在に気付くと眉を寄せ、何かを言いかけた。だけどその前に、私の口が勝手に動く。

「人を、殺してきましたんですか？」

怖くない訳じゃない。その証拠に、問いかける声が少し震えていた。この人が今までどこで何をしていたのか分からないけど、これだけ匂うのだから血が大量に流れたことだけは分かる。それが、おそらくこの人の血ではないことも。

それに前回は音を立てずに開け閉めしていた扉を、ウィルフリートさんは大きな音を立てて開け

た。そのことが、彼が冷静さを失っていることを示していた。

彼は良い人かもしれないと思い始めた矢先にこんな出来事が起きて、ここが平和な日本ではないことを痛感させられる。私も殺されてしまうのだろうか。

そう思っていたら、ウィルフリートさんから殺気が消え、表情もいつもの不機嫌顔に戻った。

「殺してなどいない」

「でも、誰かを傷付けてきたんでしよう？」

「……お前には関係のない話だ」

確かに私には関係のない話だ。だけどその言葉は私の心の奥深くを刺激した。原因不明の胸の痛みをこらえ、私は彼に両手を差し出す。

「服を脱いでください」

「……何？」

「早く。時間が経つと落ちなくなります。……心配しなくても、このことは誰にも言いません」

血液の汚れは時間が経てば経つほど落ちにくくなり、シミになってしまう。時間との勝負なのだ。私が重ねて「早く」と言うと、ウィルフリートさんは革鎧と服を脱いだ。引き締まった上半身に怪我がないことが分かって、私は密かに安堵する。

受け取った服を水に浸けると、水がみるみるその色を変えた。濡らしたタオルを彼に渡して身体を拭いてもらった後、そのタオルで革鎧を拭く。そして、汚れたタオルを水に浸けた。

二度ほど水を入れ替えて洗ったら、重曹を加えて浸け置く。

「部屋に戻っていいですよ。明日の昼には乾いていると思いますから、お部屋にお届けします」

離れた場所で立ちつくすウィルフリートさんに、私はそう声をかけた。上半身裸の男性に近くいられると正直目のやり場に困るし、こっちも風呂上がりでネグリジェしか着ていないのだ。ウィルフリートさんは少し迷った様子を見せた後、静かに階段を上っていった。

しばらく浸け置いた服を私は手早く洗い、絞って水気を切る。そして二階にある物干し場へと向かった。そこは室内だが陽当たりが良く、ベランダへ続く扉がある。

明日の天気はどうだろう、と扉を開けて外を窺うと、そこに見慣れないものがあることに気付いた。梯子だ。

いつもは倉庫に収められているはずの梯子が、屋根に向かって立てかけられていた。きっと誰かが片付け忘れたんだろう。

今から片付けようか、いや、こんな夜中に物音を立てたら迷惑か。そう思って梯子に手をかけたら、上ってみようかな……と、そんな誘惑に駆られる。さっきの出来事のおかげで眠気が吹っ飛んでしまったせいかもしれない。

少し悩んで、よし、上ってみようと心を決める。梯子に足を載せると、微かに木が軋む音がした。そして梯子を上り、屋根の上を覗いた時だった。

「……何だ、またお前か」

「わっ」

誰もいないと思っていたところに急に声をかけられ、身体がビクッと跳ねる。その反動で、梯子が反対側に傾きかけた。

だが間一髪、大きな手が伸びてきて梯子を掴み、元の位置に戻してくれる。ウィルフリートさんの呆れた声が降ってきた。

「何をしている。死にたいのか」

「あ、ありがとうございます……！」

私がお礼を言った時には、彼はすでに元の位置へ戻っていた。そして「さっさと上がれ」と冷たく言い放つ。戻るにも戻れず、お邪魔しますと言って、私も屋根の上へ上がった。

しばらく迷った後、ウィルフリートさんから少し離れたところに座る。彼は一度部屋に戻り、服を着てからここに来たようだ。

「こ、ここで何をしているんですか？」

本当は、さっきの血は誰の血なのかと聞きたかった。でも聞いてしまったら後戻りが出来なくなりそうで、その問いは心に秘めておく。

「ここは星がよく見える」

その言葉に促されるように空を見上げると、そこにはたくさん星が煌めいていた。

「……星ってこんなに明るいですね」

「何を当たり前のことを」

「私、星があまり見えないところに住んでいたんです。それに、星なんて見る余裕もありませんでした」

きっと日本でも、星はたくさん出ていたのだろう。ただ、明るすぎる電灯のせいで見えなかっただけで。星がこんなに輝いているなんて、そしてこんなに綺麗だなんて、気付かなかった。いつも下ばかり見ていたから。生きるのに、必死だったから。

「……同じだな」

「同じ？」

それは、ウィルフリートさんも星が見えないところに住んでいたということ？ それとも、星を見る余裕もなかったということ？

言葉の意味を量りかねて、視線を夜空からウィルフリートさんに移す。

その透き通る蒼い瞳に、吸い込まれそうになった。そして、目が離せなくなる。彼の目はどこか懐かしいような、そんな気持ちにさせるのだ。さっきまで怖いと思っていたはずなのに、なぜかその思いも次第に薄れていく。

それと同時に、彼は遠い世界の人なのだと思い知らされてもいた。きっと平和ボケした私には想像も出来ないほど危険な世界に、身を置いている人なのだ。こんなにもそばにいるのに、私は彼をととても遠くに感じていた。

しばらくすると、ウィルフリートさんが口を開いた。

「もう夜も遅い。部屋に戻れ」



「……はい。おやすみなさい」

前に聞いたのと同じセリフに従い、私は部屋へと戻った。

この胸の痛みは、何なのだろう。どうして、喉がきゅっと狭まって苦しいんだろう。分からない。いや、分かりたくない。

私は考えることを放棄するようにベッドへと潜り込む。

目を閉じると瞼の裏に、さつき二人で見た美しい星空が広がっていた。

翌日、いつの間にかウィルフリートさんは旅立っていた。

洗濯した服をベリンダさんが部屋に届けてくれた後に出発したらしい。私が買い出しに出掛けている間のことだった。

彼が何のためにこの町に滞在していたのか、そしてあの大量の血は誰のものだったのか、全てが謎のまま。ただ一つ分かることは、騒ぎになっていないので、相手はおそらくこの町の人間ではない、ということだけだ。

彼は旅人だ。いつ去ってもおかしくない人だったのに、なぜかこういう日が来ることを想定していなかった。こういうのを一期一会と言うのだろうか。ウィルフリートさんがどこへ向かったのかを聞くとベリンダさんにまた誤解されそうなので、とうとう何も聞けなかった。

彼がよく座っていた席をぼうっと見つめていたら、カウンターのホルスさんが声をかけてくる。

「アイーダちゃん、新作料理作ったから味見してみて〜」

「はい、今行きます」

そう返事をして、私は足早に厨房へ向かった。

物思いに耽っている時間はない。この安定した生活を守るために、働かなければ。



ああ、もう耐えられない。たくさんのお湯を浴槽に入れて、ゆっくりと浸かりたい。

そんな願望が湧き上がってきたのは、この世界に来て一ヶ月が経った頃だった。

私は東京出身ではないけれど、いわゆる江戸っ子気質だ。熱帯夜が続く真夏だろうが、底冷えする真冬だろうが、いつでも熱い風呂に浸かりたい。

それに何より、向こうから持ってきた重曹が日に日に減ってきている。全て使い切った後のことを想像するだけで怖かった。

この国には日本と同じく四季がある。夏は湿気こそ少ないものの、かなり暑くなるんだそうだ。……季節が巡って夏になったら、きつと頭がおかしくなる。その自信がある。

「毎日お風呂に入るためには、どうしたらいいのかな……」

「お風呂？」

つい口からこぼれ落ちた独り言を、ナタリシアさんに聞かれてしまった。やばい、声に出すつも

りはなかったのに。だけど聞かれてしまったものはもう取り消せないで、思い切って相談することにした。

「はい。ぜいたくだとは思いますが、自分専用のお風呂が欲しいんです」

「それは無理よ。個人用のお風呂を持つなんて、かなりのお金持ちじゃなきゃ」

「そうですよね。ああ、お金持ちになりたいです……」

人並みのお金すら持っていないのに何を言っているのだろう。でも、夢見るだけなら無料だ。

ナタリシアさんが「アイーダは潔癖症だものね」と納得したように頷いた。いいえ、潔癖症ではありません。ただのきれいな好きです。

「でも、ちよつとやそつとのお金持ちじゃ無理よ？ お風呂が家にあつたとしても、家族共用の場合がほとんどだし」

「じゃあ、どのくらいお金持ちになれば可能ですか？」

「そうですね。貴族とか領主様とか？ あ、あと——」

「あと？」

「国王陛下なら確実ね。だって、この国で一番のお金持ちだもの」

「国王陛下ですか……」

どうやらこの国には王様がいるらしい。一応、王様の名前も聞いてみたけれど、聞き覚えはなかった。もつと勉強しておくんだったなあと反省する。高校時代は卒業後に自立するためこっそりアルバイトしていたので、授業中は寝てばかりだった。世界史を選択していたのに、全く困ったものだ。

のだ。

その時ナタリシアさんが、何かを思いついたように言った。

「そういえば、王都にいる友達から手紙が届いたんだけど、陛下が側妃を探しているっていう噂があるらしいわよ」

「そくひ？」

聞き慣れない単語に、私は首を傾げる。

「要するに、二人目の奥様ってこと」

なるほど、と曖昧に頷いておく。そくひ……妃？ あ、側妃だろうか？

「アイーダ、立候補してみたら？」

「え……？」

冗談じゃない。二人目の奥様って言うって聞こえはいいけれど、つまりはお妾さんってことでしょ？ いくらお風呂のためとはいえ、見知らぬ男性のお妾さんにはなりたくない。

ナタリシアさんは冗談のつもりだったようで、困惑する私を見て、ふふ、と笑みを浮かべる。

「でも、変な話よね。陛下と王妃様はとも仲睦まじいと聞いているわ。それはもう、周りが羨むくらいなのだとか。噂が本当だとしたら、お世継ぎがないからとはいえ、お二人は側妃を迎えることをどう思っけいらっしやるのかしらね」

何やら王様と王妃様の間には子供がおらず、国民はそれを心配しているらしい。今回の噂もそのことが原因かもしれない、と手紙に書いてあつたそうだ。

そうか、王様と王妃様は相思相愛なのか。じゃあ、もしかしたら……

「側妃は周りの人間が勝手に探していて、陛下たちはそれに納得してないかもしれない、ということですか？」

「その可能性が高いわね」

つまり、側妃になっても陛下の夜の相手はしなくて済むっていうこと？　むしろ蔑ろにされちゃう系？　……願ってもない話だ。

その側妃とやらになれば、王宮の片隅で誰にも気兼ねすることなくお風呂三昧の日々。何て最高の環境なんだろう。究極の他力本願という気もするけれど、私の野望を叶えるためにはこれしかないかもしれない。

「アイーダ……？」

無言で策を巡らせている私を、ナタリシアさんが心配そうな顔で見つめていた。



そして数日後。私はお世話になった宿を出ることにした。

実は一昨日やってきた宿泊客が教えてくれたのだ。この辺りで一番大きいミディブルという町で、若い娘を集めるといふ御布令が出ていると。

それを聞いて、ぴんときた。きっとナタリシアさんの言っていた側妃募集に違いない。

指定された日時は、本日の正午。これは行くしかないでしょう。

昨夜ホルスさんとベリンダさんに別れを告げると、涙を浮かべて「いつでも帰ってきて良いからね」と言ってくれた。しかも「少しだけ」と言いつつ、今まで働いた分の給料までくれた。どこまで良い人たちなんだ。

それなのに、お風呂がないことが不満で家を出ていくだなんて、私は何て薄情なのだろう。恩を仇で返すとはこのことだ。それでもふつつつと沸き上がるこのお風呂熱は、冷ますることが出来ない。むしろ沸騰しそうな勢いだ。

ごめんなさい。もし偶然と幸運と奇跡が重なってお金持ちになれた暁には、必ず恩返しをしますね。

後ろ髪引かれる思いを振り切って、私は旅立った。

願いはただ一つ。国王陛下の側妃となり、毎日お風呂に入ること。

合田清香、十八歳。目的のためには、手段を選びません……！

ミディブル行きに乗合馬車は、明け方のまだ暗い時間に出発した。乗客は商人や旅人ばかりで、若い女性は私だけだった。

その乗合馬車で分かったことがある。商人のおじさんが、最新版だと自慢しながら見せてくれた世界地図。それを見た瞬間、私は啞然とした。私知知っている世界地図とは、あまりにかけ離れたものだったからだ。絶句してしまった私を見て、おじさんは怒っていると思ったらしく、そそくさ